部林泉名勝圖會

一冊

422

754
.A4
1

7016

佛間ノ額　孤蓬菴

碧玉菴　天正年中藍澤和尚卿創立花瀧寺宗務理統。居城筑後柳川。領十二万石。林系藤村補軒帋什寶ふ細川忠有幽齋所持の文臺硯箱あり。當寛政十年午の秋九月　紫式部の碑碣をあらたに建ぬ古墳ハ云々碑ハ故障ありて建ず圖會拾遺ゟ出す碑ハ故障ありて建ず圖會ゟ建ぬ銘ハ畑維龍。由緒ハ井後氏久米女財主ゟ恨哀五十川菅正齊田中督榮ありて九月中旬碑を建るの日供養の法莚あり觀音懺法奏樂一越調音取賀殿迦陵頻急胡飲酒羅陵王武徳樂伶官七人岡。東儀。林。三家勤之

紫式部碑　扁額隷書

紫姫者、越前守藤為時ノ女ノ也、生而穎悟、才徳夙著、姫只惟規嘗讀書、姫在傍暗誦不失一字、父撫其背曰、恨不令汝為男也、為時雅通經史、迺以其學悉授姫、迨年稍長、給事御堂公ノ家尋侍上東門院、既而適左衛門権佐宣孝、生二女、亡幾宣孝歿矣、姫持操甚堅、獨與其女居、豊ノ思讀書、通五經三史、渉佛老百家、詞藻富贍、逸思如湧、永延之朝有十才女、紫姫為之冠、内命著編新語、姫乃著源語六十帖進呈焉、外託艶詞、内存諷諭意、匝結構摛藻婉麗、前無古人、實女史之大手筆也、時之哲匠不能賛一辭也、姫有容色、貴介公子以歌通殷勤、姫拒之亦以和歌、其詞婉曲而貞烈不可奪也、其它事實、詳于源語諸註及日記等、卒葬城北雲林院、家今在院東南數百歩、但墳塋存亡、今茲寛政乙卯有尼師、傷其冢ノ日就荒廢、募縁四方同志建之碑、令維龍銘焉、

銘曰、

猗與斯人　窈窕淑貞　聞徳斯美
若瑤若瓊　雲鬢霧髪　欽采榛荊
彤管之煒　日星曒明　愛建爰勒
永存令名
寛政七年歳次旃蒙單閼小春日

鶴山畑維龍子蝮甫識

[illegible]

○當山之寮舍子菴名画名筆頗多し

龍翔寺　旧西京安井村にあり應仁の大亂慶長今　大徳寺演法堂正受のむかし
ありし所なり　開山　南浦紹明尚ほ法嗣次　延慶元年十二月廿九日
寂七十四歳　謚圓通大應國師　宋　虚堂和尚ほ　朝の後興徳万寿　建長等ほ止揚し
又西京　龍翔豊法の圓福　洛南の妙勝等　師と奉じ　開祖となす

小栗宗丹筆

客殿

墨絵

南向

落彩色

花鳥

同

引接寺　千本通北極小あり　鶏鷺堂　寺　花ほ　櫻花あり
花の時大念佛を修し　檀源信　修務都講定　覺となむ

本法寺　小川頭ほあり　日蓮宗　十六本寺の其一あり　林泉
賞ぞ　真形築山泉石　共ほ浪の紋を摸を什寶ふこ幅　對の名画あり
中央觀音　月壺の筆　たい　許由張芳洲の筆　貝盡の絵い　舜擧の筆
の絵い　舜擧の筆　貝盡の絵い　趙昌の筆　まて　ふ當寺の　ふるく　光明
皇后御筆の法華経　ほ小野道風の法華経　ほあり　阿弥光悦の法華経あり
羅漢の像　種々あり　明兆　雪舟古法眼等の筆　宗門　ふ日蓮日親等
の筆　ほ数軸あり　又名筆あり　其銘　を松風とい　中華　傳来とい　其外
数品あり　其ふ　麿の利支天の画像あり　筆者詳　ならず　足利尊氏の副幅あり

井後氏
之助

其文云

太現明王者合戦本尊也　其名公授予房公尊也　巨房卿授源
義家之仏尊　又名摩利支天當家傳之　項羽高祖　合戦
時項羽ガ軍強シテ　高祖　度々討負サル　此時　張良ガ仏尊　高祖
傳へ奉リシカハ　故ニ強ケレ　雖モ　此尊ノ
本尊ノ威光ニ依テ　吾儕無ク不開カ眉矣

氏

心慶二年十一月日

護帥撿役口傳申や
守殿

足利大和

教法寺

巴の庄
教法寺古松悦帳

治まる
治まる
治の紋
雨龍

大念佛
開闔
大念佛會

燃魔堂上
狂言奇念佛
櫻花開落時堪婆
千年本日藏夢即今
忽笑寧馨児
蘿嶌

六角堂池之坊の龍華会専慶坊より發して
山水幽谷人絶の龍中小事み品事折々の事未会自在ありて禁相と号る池坊
十方圓像の秘傳あり。海内都鄙遠近ノ人多く毎年七夕の日ニ華の
もとに參りて龍華の事ありを請ふ事今も絶ず一水記云池坊専順法師ハ立花の
傳下花の門會の時十瓶を揃ふ彼集の作首ニ入ル大永五年二月六日栗田口前
年中祭 此の記 池坊蔵の書ニ 法橋栄院 号 之
これいこされい池坊二十六代専順法師 之
其文云 立文之

先刻を池房系 内弥教 事多年 歌感
葛乃一枝 波之 来月名日 文 系 内
とて堅下 社作系 亦 上 施 地
演 し
い月午之日

施福院

七夕
池坊
立花

瓶花と
二重ふまき
とぢく

一門の
額ふ
同流
池の坊

星の
祭入の
鳴音かな

天保道

天明

池坊華道秘傳十九箇條目錄

七一色　櫻　蓮　三箇之前置　松　藤蓋
松　水仙　杜若　蓮　中段流支　蘭草
紅葉　菊　流支
三箇胴　松　竹　三箇流枝
牡丹　流支
段躑躅　二直
小卷　傳授　已上　合直
大卷　傳授　生花七種　水仙　椿　芭蕉　蓮
牡丹　蘇鉄　藤蓋

老葉集　池坊の順法師の許もとく連寄の法
當秋のさゝろ狐
義ふきうえ未葉ふちうさ秋もかし　宗祇

建仁寺　五山の其第之大和大殊　建仁二年源頼家公榮西禪師を延く地を
四條のまおあり　王城の東小路一大禪苑狐當寺真言止觀の二院を構へ官寺とす　已上元亨釋書
開祖榮西禪師　明庵と号次　備中吉備津の人其先ハ賀陽氏なりく薩州
刺史貞政の曾孫之雜髮一六八戈の時仁安三年夏四月商船に乘て
瀛海小泛んく宋國明州界ふ着一嗣法を虛庵敞和尚に請ふく建久
二年四月ふ帰朝一當ヶ狐廟ふ建保二年七月六日寂ス　年七十五

佛殿　釈迦　弥勒　土地堂　土地門隍神祠　源頼朝像
弥陀　頼家像　實朝像を安ス
開山堂　開山榮西禪師像　脇士天童を安ス
額　華藏世界　土佛門帝冠ス
方丈　正観音狐安ス　大悟堂　禪堂とも
東福門院御書附　文殊菩薩を安ス
鎮守樂大明神祠　伽中吉備津社の末祖
無盡燈　禪居　開山の両親を祀ル
庵　大鑑禪師の化土　麿形ス
赤松圓心塔　大龍ふあり　方丈　望闕樓　山門　大悟堂　僧堂
○當山十景　法拙和尚の　慈視閣　方丈　指華堂　法堂
群玉村　廃寮　入定塔　開山塔　樂神廟　鎮守　無盡燈　禪居菴
須あり
清水山　賛五橋　鴨川水　清凉軒　方丈
○扁額　三世如來殿　佛殿　法堂
悦可　維那寮　首座　茶板　夢升　浴板　等慈　書記
龍藏　東藏　虎林　西藏　春會　新客　希眞　侍香
○輕兒祠　門あり　御茶九月十六日茶礼　魏々ゝく
神輿一基あり

遠仁ち門お
十日
笑姿
嘉

お金の
價ろ
安し
哀の
柳

建仁寺
両傳院

總田有樂
作

建仁塔頭
正傳院

織田有樂齋茶亭

建仁寺畫墨曬掛屯之圖　方丈

北

観音

（墨書）

猿猴　松　牧溪筆

北

向山明庵像　周賛

猿猴　松　牧溪筆

叭々鳥　同筆

観音像　月壺筆

叭々鳥　同筆

（墨書）

面上半面漆喰
仰上　猿猴
山像　牧溪筆
九字名号
面上半面漆喰
書ヒ有

薬山　接李翺　為建仁方丈口
牧溪筆

観音像　宝徳三年三月十八日謹画ヒ
月壺筆

黄龍　接口洞賓　三軸共作之真相口
牧溪筆

（墨書）

後水尾院宸筆
観音
御筆

什寶數品あり繁ゑよりく畧之

○正傳院

十一世義翁和尚
法円寺長益再興元和七年十二月十三日辛正傳院有樂如庵ヲ号ス

書院

中ノ間　蓮鷺
西ノ間　唐ノ田揃
東ノ間　耕作
余間　山水

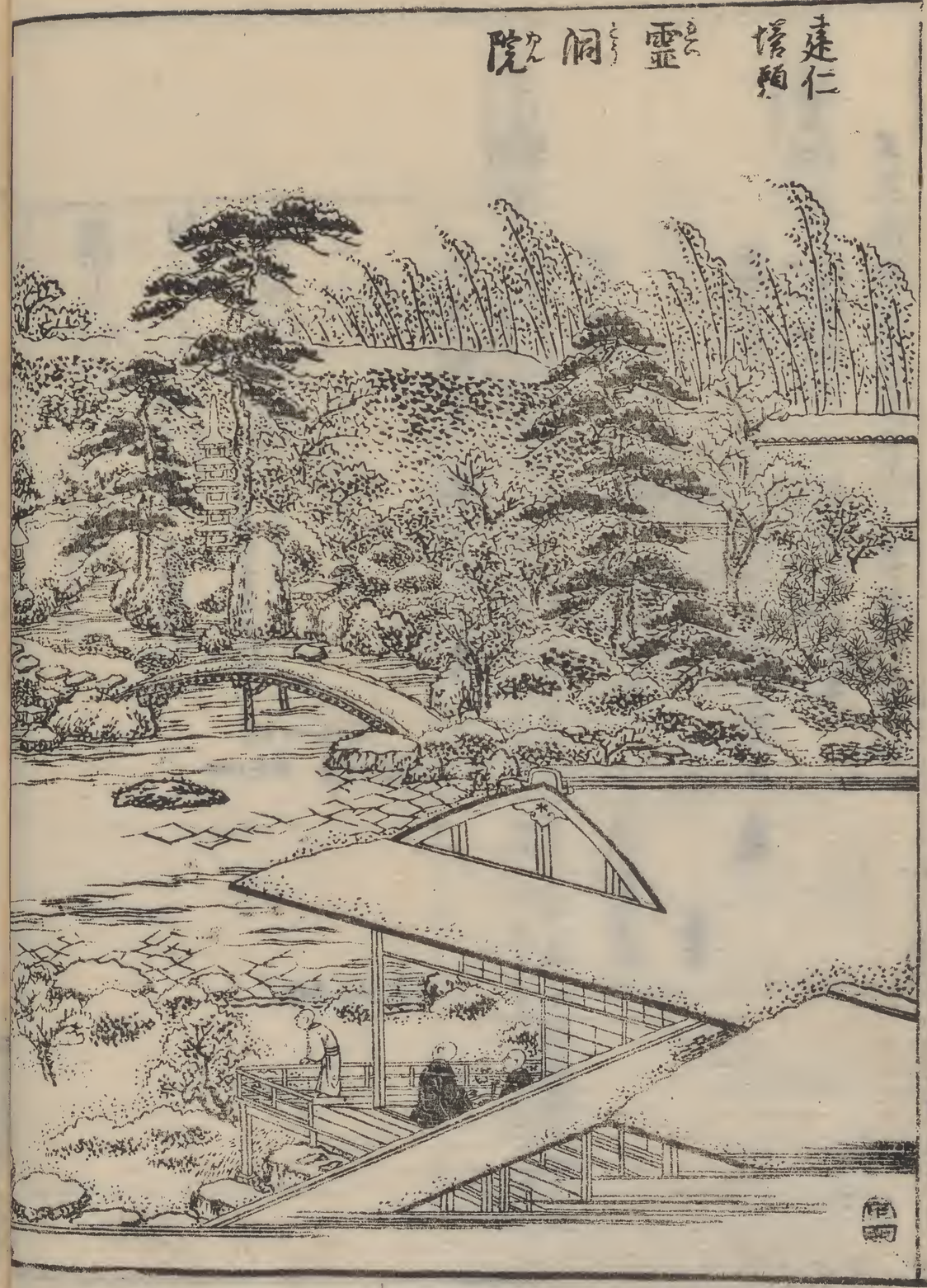
数寄屋

織田有樂の好　額如庵

○靈洞院

六世高山和尚開基
後醍醐帝元應年中建立

其外塔頭林泉名画あり畧之


建仁塔頭
靈洞院

しうるまの栄西
前九
の
頭へ
あつ
陀羅
たの
る法
れあ
ん
更
九鯉

栄西禅師へむう
この寺院の鬼達くく
鴨川の深淵ふ沈あう
しん悟ってゆくん主成
寝くう上うこそ
建仁寺
陀羅尼
勒の
法よう

四條祇園橋

むかし供奉の車百輌鈔なんどさりて安貞二年七月九日暴風雨の時洪水溢れて四条五条の橋流れ落る事和五年六月十二月祇園執行憲法阿祇園橋を濟さゝる事有新たの田楽を含老若紙集め四条の東より橋成就して見物異本太平記寶徳二年十月十日四条の東橋

橋板も今も川ふかゝるべし都にてくれに方乃旅人　正徹

往昔の官橋もあらじ洪水まく換くして観光貨令茶廓多し　特牛

万燈水の流小舟とこの東夜の壮観みるべし

月照ニ四條橋一紅樓隠ニ翠楊一徘徊倚ニ檻夜知ニ霜

蛾眉長袖青絲騎箇箇驚ニ成ニ影也忙

丈山の口の西さう　栲亭

涼しさや稚葉の中も多の月　無村

夕涼衣の都れ多ゝた　定雅

ほたるさや
袖の薄ふ
月の雲
ぎをんやみ

草の名
そらべあり
ものうへ
ぎをん
柳

夕涼
其九

魚とて
魚をかこむ
夕涼み
さまざま

こよの
美人
かたの
涼し

六柳軒

顔相見

顔見せや
ぶらぶら野郎の
名所
紅粉の
梅
きさんまち

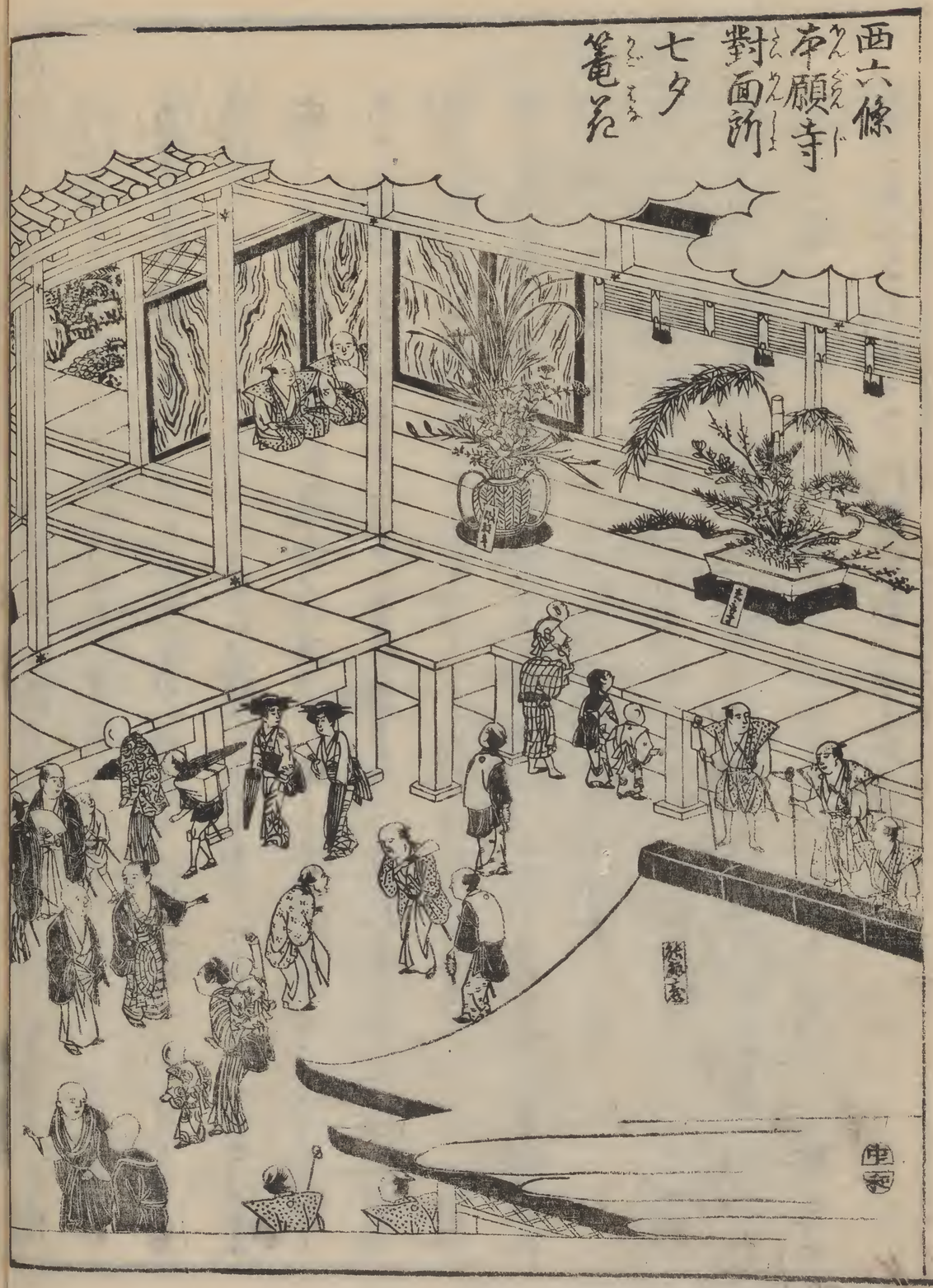
本圓寺中
眞如院
瓜實燒畑
眞如水

眞如院
烏帽子掛石

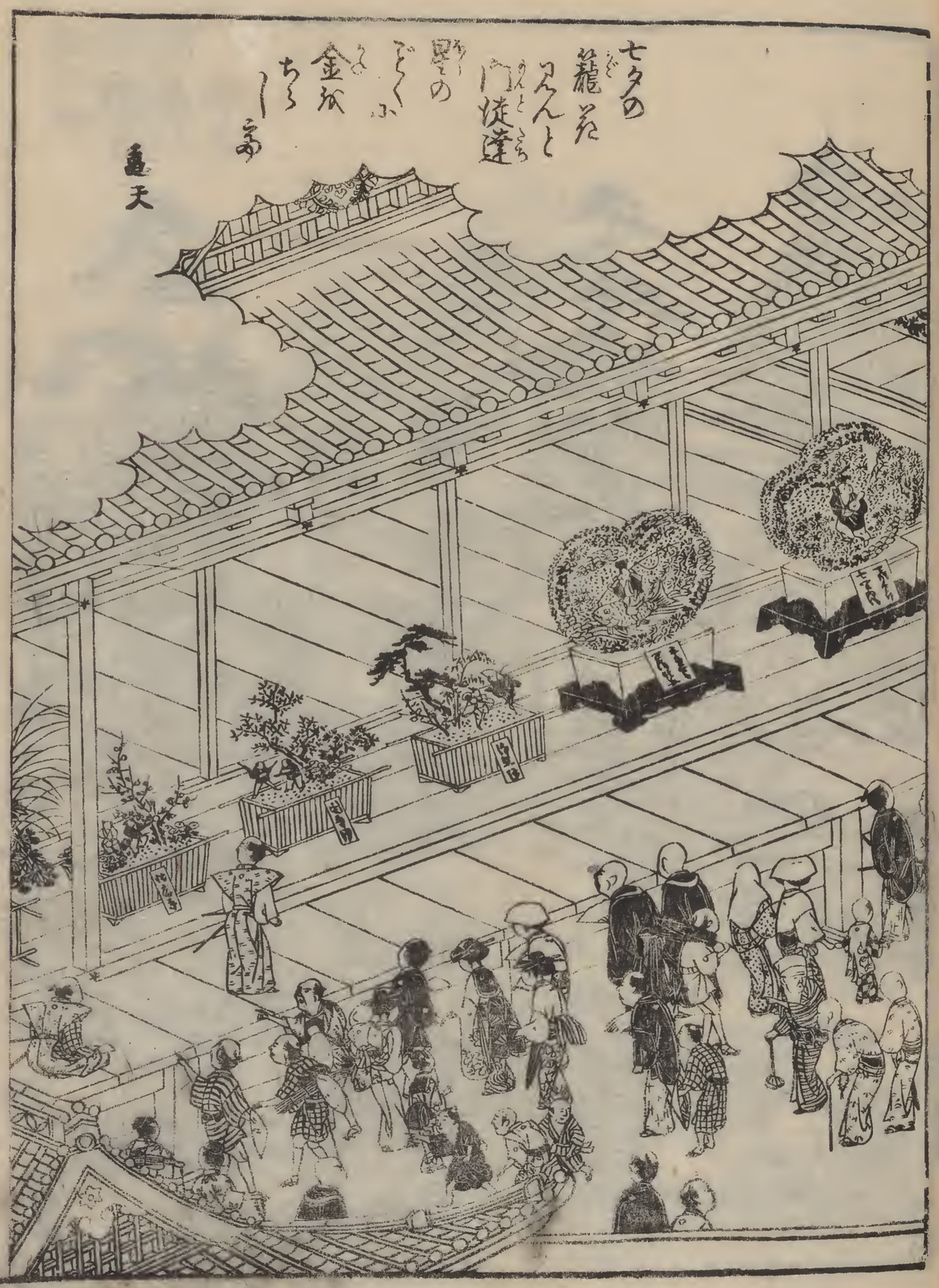
本圀寺は足利尊氏公の叔父日静上人住職の時定額寺となる亜宝多く立像
釋迦佛宗祖日蓮上人の眞蹟髪の髪門曼荼羅こゝにみの世界名高し其外祖師の
真筆多し徽宗皇帝の神の画同筆の三幅對中猫左に梅右に羊と玄宗皇帝
訪持の笙耕牧の画は虎風の若侍又毒龍の筆。
廊下の半蔀は加藤清正朝鮮より持帰りこゝに之を附と其外名画古筆若干
あり繁多ゆえこゝに略す又奉竜院の座中奇境と
本願寺 西六條 七夕の籠花數ふ
掛垂のひとまふ眞如水という名泉あり又奉竜院の座中奇境と
掃側は飾りなく未詳の祖人を觀せしむ又中元の日焼施餓鬼盛況
をのぞく候人院外より指ぐさ
落を是みる古来より内裏を表をとる事なし

眞如院は足利義昭公烏帽子形の銘く

西六條 本願寺 對面所 七夕 篭花



七夕の籠花 つんと門徒達 堅のぐふ 金灰ちらし 毫天



西六條
本願寺
對面所
林泉

同本願寺御堂盆燈籠

御堂盆會燈籠聳レ
佛智光明
不遠思ヒ
一念則チ
王極ー
樂土
多ク投ケ
金寶
淚袂ニ
流レ

東本願寺　東六條　近年天明の末田祿神の災罹しより直ち洲尾の
御堂を引移して假本堂とし諸國より數多の門徒競ひ來りて新たより
大本大石数百疋寄附し粉骨碎身して出精急ぐ多の年を累ぬ本堂
阿弥陀堂菊の門南北門玄関達摩堂大寢殿小寢殿白書院
黒書院鐘楼數楼大寢殿小寢殿の殿舍の数々庫蔵墓所茶所等至て嚴重壯麗
とく〳〵成就し今年弥生廿八日本堂開山尊影の遷座卯刻二日より
阿弥陀堂の遷佛あり是又拜せんとて関東関西乃至諸國より波濤
を凌ぎ稍森のごく參詣の門徒境内の寂々を充滿せり實に開山親鸞
聖人末代の攝法を鑑く道俗男女を安く善所に至らしめん宗風弘通
於ひてをや有難も又やうと〳〵
仏舘舍のごとく大寢殿小寢殿の名目ある
三位晋親卿の殿舍之其林泉を
眺望く松を樹風系うほく寢殿の額目
某紙ありく寢殿の額目あり
歌人

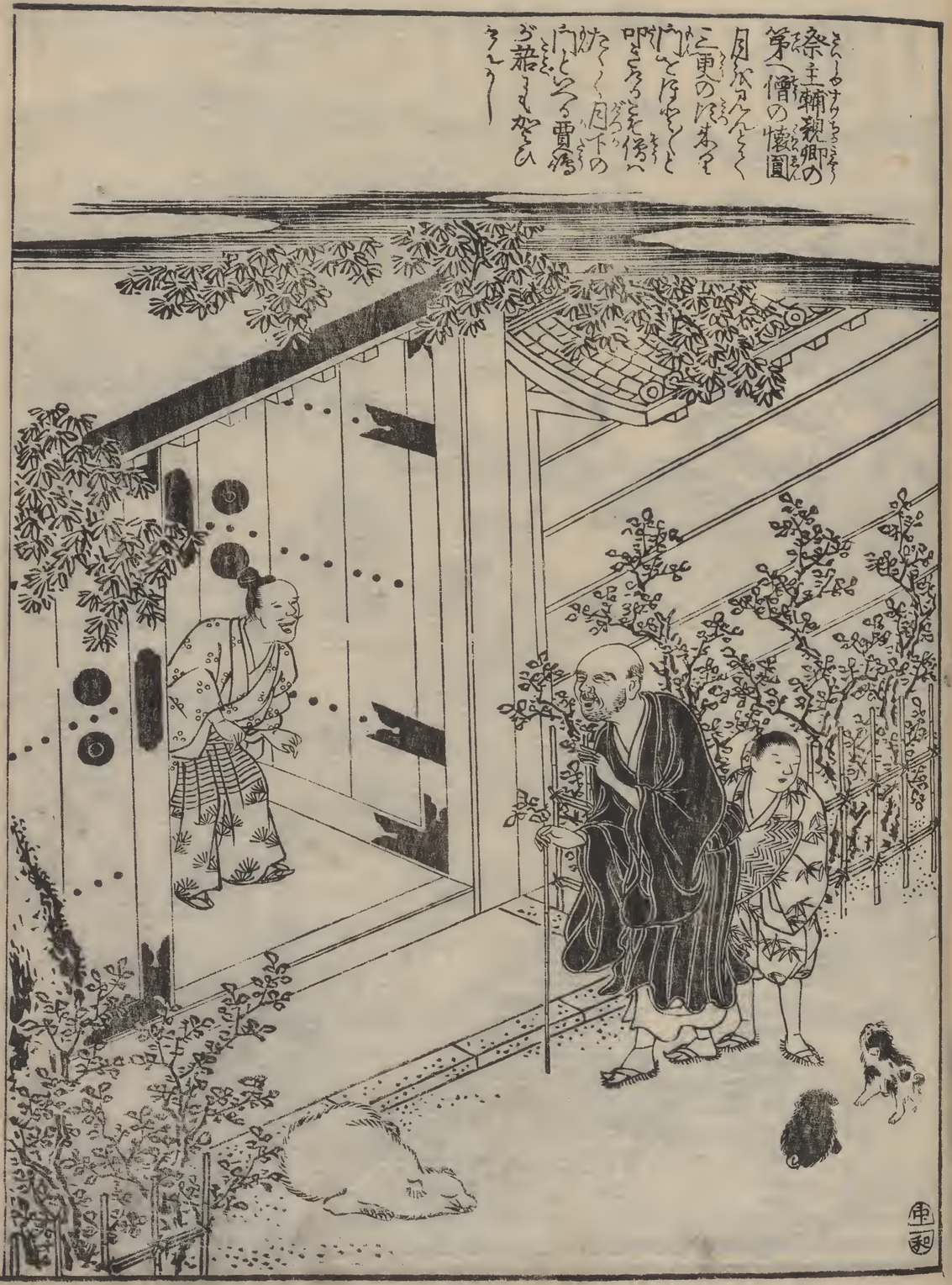
後拾紙云
南院八海橋立也輔親卿家之爲見月寢殿南庇不差云云
懐圓ガ池水ハアレノ河ニヤカヨフラント思フニ寢殿ノ
ハルニ來ヌテ人モ子ヌラント思フニ寢殿ノ名目ヲ
相乐二条興詠此哥曉更ニ帰ルト云云

續日本後紀云
東鴻臚館跡　帝王編年記云南小二町　起二七条坊門一至二南七条一東西
二町　起二東壬生一至二西朱雀一皆是東寺建立之後云
美和六年八月辛酉以テ東鴻臚院地二町一宛テ典藥
寮一爲二御藥園一

又槐秘抄云
七条朱雀東西鴻臚館ト云所ハ異國ノ人ヲ置ル所ナル
ヨシ見タリ村上ノ御日記ニ蕃瓜ノ西瓜ヲ鴻臚館ノ
新ラシキ人ニ給ハスト云事アリ

帝王編年記云
延喜八年渤海客來朝於鴻臚館
和漢朗詠
前途程遠馳思於鴈山之暮雲
後會期遥霑纓於鴻臚之曉涙

後江相公



祭主輔親卿の第一僧の懐圓月次のくんとくく
二更の比ある門とをたゝくと叩きけるを傳へ聞て
たゝく人は誰下の門とゝる貴僧ぞ給もかなひ
うんぬん

六條内裏　拾芥抄云北六条坊門南六条通西八条東洞院東六条殿承保二年新宮公遊之一六條内裏あれど又云六條院ともいふ皇女郁芳門院も此御所ともいふ
世人所云皇女薨卜申人源寺
幽師の徒弟法照六条御堂と草て禅都とみと万寿寺弘長年中重一
万寿寺焼失しめれど東福寺の
塔頭三聖寺の内に遷次
園太暦云
白河院承保二年八月廿日六條新宮棟上也讃岐守顕季造營之
百練抄云
承保二年十二月九一日迁幸新造六條皇居
中右記云
寛治八年正月二日行幸上皇御所六條殿郁芳門院同御此所
百練抄云
保安四年十一月十日六條院焼亡本郁芳門院御在所今為仙洞
六条院ともく展元公筆と云額を焼せ給ひしとぞ
家集
楊名ともにのまことをおもふこゝろにたちそふ
中右記云
天仁元年八月七日郁芳門院御國忌也未刻許参六條御堂
釣殿院　拾芥抄云六条北東洞院東号六条院
光孝天皇御所云云付属淳子内親王
三代實録曰
天長八年生二天皇光孝於東京六條第　拾芥抄云光孝天皇降誕所
篇中抄云　小松殿云云
釣殿院今六條院也　藤原定家云原氏ありしほうの名ありや
六条殿院あり今のあるや

東三條殿
三位中將
雅信卿
故殿の御女
藏の御息所
寛平法皇
池やその
むかしの
まゝなれど
すむ月の
影にぞ
みゆる
業平朝臣

寺

桂宮

桂宮は六條の北西畑院の西にあり。いつの頃にや帝わかく數ゝ御門おはします。桂の女房あり。常に桂の傍の長者が原邊を時くうんなりの比長者宮と呼ぶ。桂の村にうんばしてそ桂心は圖ありてよく人の知る所なり。

八條

遍照心院方丈

其一

初ハ愛宕圀所
此具後年可然
補ヒ

遍照心院　八條梅司ノ六孫王源経基公ヲ祀ル　元徳五年艷遊ノ多ク記ス所ナリ　六孫王権現ト崇ム所ノ
其後鎌倉右大臣實朝公ノ護摩堂之位牌尼　法名本學坊門府信清公ノ女　大檀越ト成
本幡廻心上人ヲ請シ開山ス　戒律之論專言菓學ノ淨刹ニ
鎌倉二位禪尼　平政子　伊豫國新居庄ヲ寄ル　右府將軍ノ菩提場ト
ス　正堂ニ阿彌陀　運慶ノ作　方丈ハ中央
寶冠釋迦佛　左　源實朝公ヲ永之元年正月廿七日佛家
八條禪尼文永十一年九月九日迄ス　方丈ノ額　圓窓　光悦筆ト
矛盾スト雖モ　遍照心院ノ額　光悦筆　宗眞筆　誕生水　方丈ノ東
宝永年中坊中東林院南谷師　將軍家ニ願ヒ今ノ如ク繁昌ヲ再
興ス乃チ眞上例茶九月十一日神事　南谷師ハ近代ノ能筆ニテ當
方丈ノ林泉ハ廬山ヲ移シ　放生供養アリ　ル所ノ歸人傳ヘ悲シ
飛泉ヨリ白砂ヲ布テ流水ヨリ風來眞如ノ文窓圓師ノ作ト後世ニ
乃チ伏見ノ朝雲筆ト助ケ　者補修ヲ加ヘ　ト云ヒ

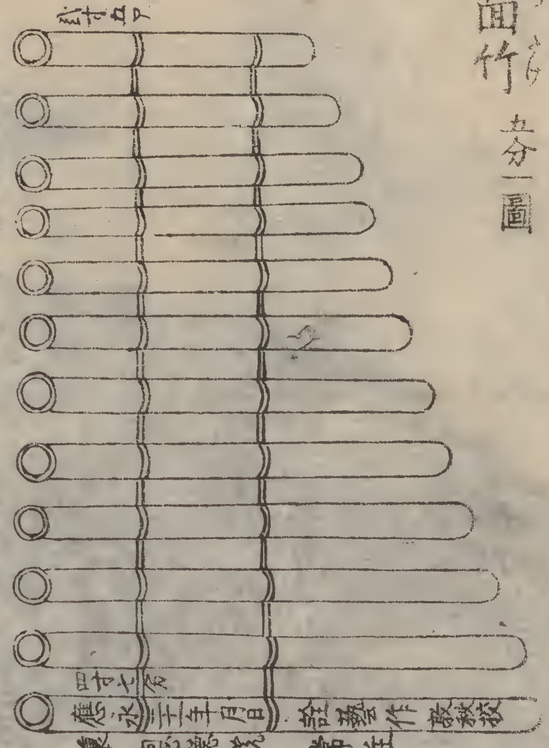
九月十一日
六孫宮
御参

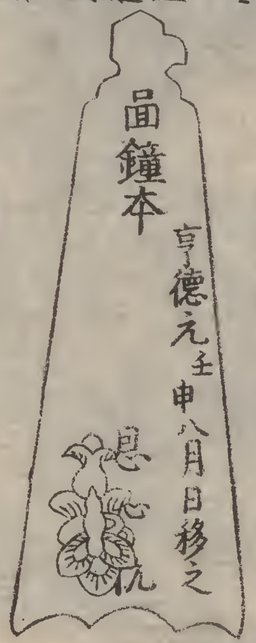
宝永年中ゟ
再興ニ而
世ニ宝永参と

大通寺中
寶法院

乙遍照心院の寶救ある將軍家御寄附の武器多し文永律の圖竹あり

笛竹 六分一圖





副笛之

年沢十二律者恩德院詮慧亜樂人敦秋之両人歴十二箇年應永十九年調畢故号之年沢双調功黄鐘盤渉之二管有年沢之同他詮慧所被相圖之也第又乗調鐘之横者後花園院宇奏之於禁裏換金於木金木雖異音律相協故違上聞有叡感是亦為霊寶自餘以来雖為恩德院累代交割昨今雖為長老坊藝我領望茲滿而已

恩德院

○恩德院或京程圖云在八條室町乗顯隆堂金色堂恩德院等載二千一所一云云或云今遍照心院洛頗有二恩德院一至二于後世一而迂之一乎暁筆記云洛陽為洞院恩德院云云

○實法院ニ林泉廣くして東ふの風景氣ふく君の日乃眺を
あら特ふ蓮池あるくみふ月の光盛ふ香芬そこくく紅白の蓮を
なるべし其外凡紅赤蓮かどの名草多くおれ松又んせくく
朝日の出るを待く群來る騒人奔ようみ詩悠くく水芙蓉松嘗ずる事
和漢異そうびく紙女ゞ歌妃子ゞ歩芳氣十里ふ皆ゝえ花の君子ふる賞淡
蓮と愛そる事ニ千ふ同じくた花の人そと我叔もほゞ看れ々る

來蓮曲　　梅亭

來ル蓮溪上ノ女祇向ニ花ノ多キ處ニ花多キ人不ル見
花底聞ニ花ノ語ヲ始テ見ル花乃チ知ル薄情ノ子
入レテ花ニ花入レ見出レテ花只ル是宿ニ他家ニ

蓮のまや水をさるふく莖ニす　　無村

回塔頭　蓮ふの底朝日涼しい神の園　　蘿月

○東林院門外の東林泉廣く東南をうけて月ふ名ふ美觀たゞの一事
ゑ仏院ふ書室南谷師の住居ふくく庭中の西ふ高齋あり
一行の扇や階ふ月を欹を　　蕪村

大通寺
東林院
南谷師舊棲

東林院
其貳

南谷師
書齋
幻華庵

南谷師の
旧棲
ゆかし

庵ふまて
筆威
のちかや
ふめるつゝし

松雄書

東寺
寶輪院

茶亭ノ庭

容菴作

東寺御影供

御影供の日
茶筵世ろ
鴨家公足
ワてくく

能勝丸

調合所
本家京都や

切符

東寺山吹

岡本氏林泉

朝房侍之外と
いとこの作りとて
額ハ烏石葛辰の
筆と

東寺 九條大宮 河海おゝ云遷都のそど兒東西の大宮小云舊察以置弘仁
以來東鴻臚以東寺と〜弘法大師ヲ賜ふ東寶記ニ大師東寺ヲ給て
昇眞言密教の場と〜結構の堂舍造立の佛像年中行事僧綱の威儀
皆古ゆゑ〜く唐の青龍寺の風を移ぶ柿本山ニ京師の古寺ゆゑ
傳來の什物小鴻臚館ゟ以來の書四字年號ある等物一ゟ年あ〜書代々
の大政官符古格の筆跡大師の書寺寶庫五箇ヲ始ゟ故小御案出拜ゟ
あゝび時ヲ臨ゟくゆゑづく安〜ゟゝ年も
坊中寶輪院の林泉あゝ泉水の中ニ沸泉ニ所あゝ書院の画ゟ海水
支考の筆ゟ老の圖ニ都て遠山坊中ヲ名画名筆多〜林泉ヲ亦多くゝく
訪ゝ沸泉の清水あゝて樹木氏言ヲ以ゟ東ヲ他境ヲ勝ゟ云ゝれゟ

都林泉名勝圖會卷之壹 終